

報 告

小学生の向社会的行動と学校愛着および学級愛着との関連

奥野 誠一¹⁾, 藤本 昌樹²⁾
鎌倉 利光³⁾, 糸井 尚子⁴⁾

〔論文要旨〕

本研究は、小学生を対象とし、向社会的行動と学校愛着および学級愛着との関連を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。(1)男子より女子のほうが向社会的行動傾向は高い。(2)高学年のほうが低・中学年より向社会的行動傾向は低い。(3)低学年と中学年の女子の場合は、学校愛着が高い場合ほど向社会的行動傾向も高い。(4)高学年の場合は、男女とも、学校愛着と学級愛着が高い場合ほど向社会的行動傾向が高い。

Key words : 向社会的行動, 場所への愛着, 学校愛着, 学級愛着, 小学生

I. 研究の背景

厚生労働省は、子どもの心の問題が複合化・深刻化していることを指摘し、「子どもの心の診療医」を確保するための提言を行った¹⁾。一方、文部科学省によれば、不登校の小学生数は、平成3年度には約1万2千人であったが、平成17年度には2万2千人にも上った²⁾。また、学校に登校してはいるものの、学校回避感情を持つ者が存在することも指摘された^{3,4)}。岡安は、学校不適応には、不登校だけでなく、学校生活における慢性的な不快感や、心理的な苦痛を感じている状態をも含むとした⁵⁾。このように考えると、たとえ登校していても学校生活に不適応感を抱く子どもは多いと言えよう。

上記のような視点から、子どもの心の問題にアプローチする手法として、学校ストレス研究がある。小学生の学校ストレスに関する一連の

研究では、対人関係がストレスサーとして存在し、ストレス反応に大きく影響を及ぼし、ストレス反応が高い場合には学校不適応感も高くなることが示された(嶋田⁶⁾など)。

人間関係上のストレスを低減する要因の1つに、社会的スキルがあげられる。社会的スキルは、一定の階層構造を持ち、その構成要素の1つに向社会的行動がある⁷⁾。向社会的行動とは、他の人を助けようとしたり、相手の利益になることをしようとする自発的な行為のことである⁸⁾。共感性や道徳的判断といった感情・認知面の要素とは区別され、これらを媒介として外に見える形で表現されたものとされる⁸⁾。

二宮らは、小学校5年生と中学校2年生を対象として、小学校5年生の方が向社会的行動経験などの「たくましい社会性」が高く、また、男子よりも女子において向社会的行動傾向が高かったと報告した^{9,10)}。嶋田らは、小学生を対

The Relationship between Prosocial Behavior and School/Classroom Attachment in Elementary School Children

[1933]

Seiichi OKUNO, Masaki FUJIMOTO, Toshimitsu KAMAKURA, Hisako ITOI

受付 07. 5.22

採用 08. 2.27

1) 山形大学地域教育文化学部 (臨床心理士/研究職)

2) 静岡福祉大学社会福祉学部 (臨床心理士/研究職)

3) 愛知大学文学部 (臨床心理士/研究職)

4) 東京学芸大学教育学部 (研究職)

別刷請求先: 奥野誠一 山形大学地域教育文化学部 〒990-8560 山形県山形市小白川町1-4-12

Tel/Fax : 023-628-4362

象として、社会的スキルの獲得と心理的ストレスとの関係について検討した¹¹⁾。その結果、人間関係や他者からの叱責に嫌悪感を抱く児童が、不機嫌・怒り、無気力といった情緒反応や引きこもり行動を示す場合には向社会的スキルの獲得がこれらの抑制に有効であることを示唆した。

石川らは、不安症状と社会的スキルとの関連について検討し、向社会的スキルが高い場合には、引っ込み思案行動が高い児童の「分離不安」、「心配」、「強迫傾向」といった不安症状は低いことを示した¹²⁾。

このように、向社会的行動は、小学生の円滑な人間関係の形成や、精神的健康に影響を及ぼすと考えられる。

小学生の人間関係や精神的健康に影響を及ぼす要因として、学校や学級の風土や居心地といった視点に着目した研究が行われてきた。たとえば、松山らは、学校や学級に対して帰属意識を高めて、心理的に安定感を持って学校生活を送ることが教育効果に深いかかわりがあると考え、スクール・モラルという観点で子どもを捉えた^{13,14)}。塩見らは、小学4～6年生を対象に自己肯定感・対人的な問題と学級満足度の関係を検討した¹⁵⁾。その結果、対人的な問題があっても、自分の居場所が学級にあると認知している場合は、自己を肯定的に捉え、対人関係も良好と捉えていることが示された。古市は、小中学生を対象として、学校ざらい感情という概念を測定し、学校ざらい感情は、①小学生よりも中学生のほうが強く、②女子よりも男子のほうが強く、③級友適応と強い関連がある、ことを示した⁴⁾。

このように、学校や学級の居心地の良さとそこで展開される人間関係と関連のあることが示されている。しかしながら、これらの研究で用いられてきたさまざまな概念は、適用範囲が広く、厳密な概念であるとは言い難い。

一方、環境心理学では、人と場所との感情的な結びつきのことを、「Place Attachment (場所への愛着)」とし、この観点からの研究では、場所への愛着が個人の発達や適応と関連するという知見が得られている¹⁶⁾。愛着とは、人が特定の個体に対して持つ感情的な結びつきのこと

である。愛着研究は、発達心理学で多くの研究がなされてきた。初期には乳幼児期の母子関係に着目されることが多かったが、その後、母以外に日常的に世話をしてくれる人（たとえば、祖父母や教師）との間にも愛着が形成されることも示された¹⁷⁾。

子どもの学校生活に深く関わる学校や学級では、複数の人間関係が展開される。子どもの仲間関係は、親子の愛着関係と似た特徴を持っていることも明らかにされてきた¹⁸⁾。そのため、場所への愛着は、その場所で展開される人間関係を基礎とした、人間関係に対するイメージの総体と考えられる。

したがって、学校や学級の風土や居心地について、場所への愛着という概念から捉えなおすことは有用である。

そこで、本研究では、これらの知見を踏まえ、学校あるいは学級との感情的な結びつきを「学校愛着」、「学級愛着」という概念で捉えた。

小学生にとって、生活時間の大部分を過ごすのは学校である。そのため、学校や学級に愛着を抱くか否かは、児童の向社会的行動の発達や獲得に影響を及ぼすことが予想される。これらの関連が明らかになれば、子どもの学校不適応や人間関係上の問題に対する示唆が得られるのではないだろうか。

そこで、本研究では、小学生を対象として、①向社会的行動の性差および学年差、②学校愛着・学級愛着と向社会的行動との関連、の2点を明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 対 象

東京都の公立小学校1校の全児童436名。このうち、欠損値が2割未満の者405名（低学年：男子86名、女子56名、不明1名；中学年：男子45名、女子49名；高学年：男子83名、女子85名）を有効回答とした。

2. 質問紙の構成

i 向社会的行動に関する項目

内藤¹⁹⁾や金子^{20,21)}などを参考にし、独自に作成した。8項目5件法（「1：やったことがない」から「5：チャンスがあればいつもやった」）

で回答を求め、得点が高いほど向社会的行動傾向が高いことを示すよう得点化した。

ii 学校愛着および学級愛着に関する項目

松山ら^{13,14)}や、古市⁴⁾などを参考に、学校愛着および学級愛着を測定しうる項目を独自に作成した。小学校では、学級での活動が主であるが、縦割り班活動や行事など、学校単位での活動も多い。したがって、学校愛着と学級愛着の2つの概念を仮定した。16項目からなり、「1:はい」、「0:いいえ」の2件法で回答を求めた。

いずれの項目とも、項目の設定に当たって、心理学の専門家4名で協議し、内容的妥当性が高いと判断された項目を採用した。

3. 手続き

担任の監督のもと、学級での一斉実施による質問紙調査を行った。1問ずつ担任が読み上げ、必要に応じて質問項目の意味を教える手順を踏んだ。

Ⅲ. 結 果

1. 向社会的行動に関する項目

向社会的行動に関する項目の因子構造について検討するため、主因子法による因子分析を行った。共通性が.20未満のものを削除する基準とし、該当する項目を削除し、繰り返し因子分析を行った。その結果、1因子(6項目)が抽出され、仮定に基づき「向社会的行動」($\alpha = .78$)と命名した(表1)。

2. 学校愛着および学級愛着に関する項目

学校愛着および学級愛着に関する項目の因子

構造について検討するため、主因子法による因子分析を行った。共通性が.20未満のものを削除する基準とし、該当する項目を削除し、繰り返し因子分析を行った。その結果、2因子(12項目)が抽出された(表2)。第1因子は、「わたしは、できるのなら、すぐにでも学校をやめたいとおもいます」、「わたしは、この学校でべんきょうできることがうれしいです」等、学校に関する項目から構成されたため、仮定に基づき第1因子を「学校愛着」($\alpha = .82$)と命名した。第2因子は、「わたしの組の人たちは、みんな、わたしに『しんせつ』です」、「わたしの組では、テストの点がよくなかったとき、からだのよくないとき、みんなで助けあっています」等、学級に関する項目から構成されたため、仮定に基づき「学級愛着」($\alpha = .65$)と命名した。

3. 向社会的行動、学校愛着、学級愛着の性差・学年差

まず、「学校愛着」、「学級愛着」の逆転項目を反転し、「向社会的行動」、「学校愛着」、「学級愛着」の因子得点をそれぞれ算出した。いずれも得点が高いほど、各傾向が高くなることを示す。

次に、「向社会的行動」、「学校愛着」、「学級愛着」に性差および学年差がみられるかどうか検討するために、性別(男子・女子)と学年(低学年・中学年・高学年)を独立変数、「向社会的行動」、「学校愛着」、「学級愛着」をそれぞれ従属変数とした2要因分散分析(2×3水準)を行った。

表1 小学生用向社会的行動に関する項目の因子分析結果

質問項目	抽出因子 向社会的行動 $\alpha = .78$	共通性
2 ともだちがけがをしたり、びょうきのときはげましてやった	.703	.494
7 いいものは、ともだちにもわけてやる	.640	.410
4 ほかの人の「しっぱい」をわらったりしないではげましてやった	.614	.377
8 ゲームやスポーツのルールをおしえてやった	.605	.366
5 じぶんの「そん」にならないようにしんせつにする	.597	.356
6 まわりの人に元気にあいさつしたり、はなしかけたりした	.532	.283
固有値	2.29	
寄与率(%)	38.11	

(主因子法)

その結果, 向社会的行動については, 性別 (女子 > 男子), および学年でそれぞれ主効果が有意であった ($F(1, 398) = 10.54$; $F(2, 398) = 14.55$, いずれも $p < .01$)。学年について多重比較を行ったところ, 高学年の方が低学年・中学年よりも得点が有意に低かった。

学校愛着については, 性別, および学年でそれぞれ主効果が有意であった ($F(1, 398) = 24.82$; $F(2, 398) = 13.67$, いずれも $p < .01$)。また, 交互作用も有意であった ($F(2, 398) = 6.95$, $p < .01$)。単純主効果検定の結果, 低学年では, 学校愛着得点は, 女子のほうが男子よりも有意に高かった。また, 男子では中学年のほうが低学年・高学年より有意に高く, 女子では高学年が低学年・中学年より有意に低かった。

学級愛着については, 学年の主効果が有意で

あった ($F(2, 398) = 13.88$, $p < .01$)。多重比較の結果, 低学年のほうが中学年・高学年より得点は高かった。

4. 学校愛着・学級愛着が向社会的行動に及ぼす影響

次に, 学校に対する愛着が向社会的行動に及ぼす影響を検討するために, 学校愛着および学級愛着を説明変数, 向社会的行動を予測変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った。なお, いずれの尺度にも性差・学年差がみられたため, 性別と学年別の条件に分けて分析を行った。その結果を表3に示した。

低学年男子および中学年男子では有意な重回帰式は得られなかった。一方, 低学年女子および中学年女子では, 学校愛着が大きな影響力をもつことが示された。高学年では, 男女とも学校愛着・学級愛着とも影響力をもつことが示さ

表2 学校に対する愛着に関する項目の因子分析結果

質問項目	抽出因子		共通性
	学校愛着 $\alpha = .82$	学級愛着 $\alpha = .65$	
2 わたしは, できるのなら, すぐにでも学校をやめたいとおもいます	-.725	-.096	.535
7 わたしは, この学校でべんきょうできることがうれしいです	.700	.247	.552
3 わたしは, じぶんの学校がほめられると, とてもうれしいです	.665	.229	.495
5 わたしは, 学校を一日でもやめたくないです	.565	.230	.372
8 なんのためにがっこうにいくのかわからない, と思うことがよくあります	-.548	-.110	.313
4 わたしは, 学校のきまりをまもりたくないことがよくあります	-.526	-.156	.300
6 わたしは, この学校の「ふんいき」がなんとなくいやです	-.510	-.182	.298
13 わたしの組の人たちは, みんな, わたしに「しんせつ」です	.258	.647	.486
15 わたしの組では, テストの点がよくなかったとき, からだのよくないとき, みんなで助けあっています	.005	.555	.308
10 わたしの組はよくまとまっていて, いろいろな点でほかの組よりもよいと思います	.253	.489	.303
16 わたしの組に, わたしがしっぱいするところこぶような人がいます	-.136	-.462	.232
14 わたしの組には, わたしのそんけいする友だちがいます	.284	.352	.205
二乗和	2.845	1.548	
寄与率 (%)	23.712	12.900	
累積寄与率 (%)	23.712	36.613	

(主因子法; パリマックス回転)

注) 因子負荷量 .35以上は四角で囲んである。

表3 学校愛着・学級愛着得点と向社会的行動得点との関連

従属変数／向社会的行動												
男子							女子					
低学年		中学年		高学年			低学年		中学年		高学年	
独立変数	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β
学校愛着	.084	.079	-.127	-.091	.292**	.232*	.368**	.354*	.309*	.309*	.306**	.263*
学級愛着	.040	.022	.246	.232	.305**	.249*	.159	.136	-.025	-.031	.318**	.278**
R	.087	n.s.	.262	n.s.	.379**		.383*		.310†		.411**	
R ²	.008		.069		.144		.147		.096		.169	

* $p < .10$ ** $p < .05$ *** $p < .01$

れた。

IV. 考 察

1. 質問項目について

各項目についての因子分析の結果、項目の内容から、「向社会的行動」、「学校愛着」、「学級愛着」と命名した。

α 係数は、おおむね満足できる値であり、項目の内的整合性は高いといえよう。

性差や学年差については、高学年よりも低学年のほうが向社会的行動傾向は高く、男子よりも女子のほうが向社会的行動傾向や学級への愛着は高いことが示された。

高学年よりも低学年、男子よりも女子のほうが向社会的行動傾向や学級への愛着は高いとの結果は、二宮ら^{9,10)}や古市⁴⁾を支持する結果と考えられる。

とくに女子は、男子に比べて、学年が上がるに連れて周囲の人とかかわりを持とうとする傾向を強める。向社会的行動は周囲と仲良くするために重要である。そのため、女子のほうが全体的に向社会的行動が高いと考えられる。

また、本研究で使用した質問項目の問題もあげられよう。本研究では、1年生から6年生まで同一項目で比較するため、比較的単純な質問項目を設定した。学年が上がるに連れて、本研究で使用した項目よりも向社会的行動は複雑化し、顕在化しにくくなることも考えられる。今後は、学年ごとの特徴を項目に盛り込む等の詳細な検討がのぞまれるものの、本研究で使用した項目はおおむね妥当であったといえよう。

2. 向社会的行動と学校・学級愛着との関連

性別、学年別に学校愛着および学級愛着が向社会的行動との関連について検討したところ、低・中学年の男子の場合、学校への愛着は向社会的行動とは関連がないことが示唆された。これに対して、女子の場合は学校愛着が向社会的行動の高さに大きく影響していることが示唆された。高学年になると男女とも、学校愛着・学級愛着とも影響を持つことが示唆された。

これらのことから、愛着の対象が学校や学級といった場所性のものから、より対人的な関係性の強いものに変化したと考えられる。低学年

から高学年までの間に、多人数の集団で広い人間関係から、少しずつ特定の親密な人間関係を形成するように移行していく。低学年のうちは、広い人間関係に基づき、学校や学級に対して居心地が良い場所かどうかといった全体的なイメージに対して愛着を抱くのではないだろうか。高学年では、特定の親密な人間関係が形成されると、個々人との関係性から場所への愛着が形成されるようになるのではないかと考えられる。小学生の場合、女子のほうが男子より人間関係の発達が早い。そのため、女子において学校愛着や学級愛着が向社会的行動を促進すると考えられる。

本研究の結果は、学校や学級が居心地のよい場所であると認知することが子どもへの教育効果を高めるといった先行研究の示唆とも一致するものといえよう。学校愛着・学級愛着が高いほど、その場で展開される人間関係上で、向社会的行動が高まることは妥当な結果であるといえよう。

また、近年、学校において子どもの社会性の発達を促すプログラムの重要性が指摘されている²²⁾。

本研究結果からは、社会的スキル・トレーニングなどをする際、学校や学級に対して愛着を形成するように実施するとより効果を促進するのではないかと推測される。あるいは、学校や学級に対する愛着の形成が効果的なプログラムを実施する前提条件となる可能性も示唆する。この点については、今後の検討が望まれる。

以上のように、学校関係者にとって、子どもに学校や学級に愛着を形成させる環境を提供するために、学年が上がるに連れて、より個人的なレベルで、他者と人間関係を結び、維持する能力を高め、子ども同士が人間関係を良好にし、お互いの結びつきを強めることが必要であるといえよう。

3. 今後の課題

本研究は、1つの小学校の児童を横断的に検討したものである。そのため、探索的な結果として位置づけられるものの、結果の一般化のためには、複数の学校から調査を行う必要がある。

また、本研究では、担任が質問項目を読み上

げるという手続きをとった。この方法は、とくに低学年において、項目の意味がわからないために回答できないという事態に備えるためであった。しかしながら、この方法はとくに、低学年において教師を意識して、社会的に望ましいと思われる回答をするといったバイアスがかかる可能性がある。今後は、行動観察や他者評定を組み合わせるなど調査方法をより洗練する必要がある。

本研究では、学校愛着および学級愛着と向社会的行動との関連について検討したが、学校愛着および学級愛着ならびに向社会的行動の形成においては、自分より年長の者に世話された体験や、年少の者を世話する体験による部分も大きく、家庭環境や地域の環境にも影響を受けるであろう。本研究の因子寄与率の値がやや低かったことから多くの要因が仮定されることが示唆される。今後は、家庭環境や地域性についても考慮し、学校愛着や学級愛着を形成するプロセスについて検討する必要がある。

このように、今後、学校・学級愛着についての検討を重ね、社会的スキル・トレーニングなど学校への適応を高めることにつながる具体的な方策との関連を探ることが重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 『子どもの心の診療医』の養成に関する検討会 報告書. < <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/03/h0330-13.html> > (平成19年5月16日), 2007.
- 2) 文部科学省. 生徒指導上の諸問題の現状について < http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/09/06091103.htm >. (平成19年5月16日), 2005.
- 3) 森田洋司. 「不登校」現象の社会学. 初版 東京: 学文社, 1991.
- 4) 古市裕一. 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因. カウンセリング研究 1991; 24: 123-127.
- 5) 岡安孝弘. 学校ストレスと学校不適応. 坂野雄二, 宮川充司, 大野木裕明編. 生徒指導と学校カウンセリング. 初版. 京都: ナカニシヤ出版, 1991: 76-88.
- 6) 嶋田洋徳. 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究. 東京: 風間書房, 1998.
- 7) 長崎 勤. 社会性の発達とその障害—文化の共有と継承—. 長崎 勤, 宮崎 眞, 佐竹真次, 他編. スクリプトによる社会的スキル発達支援—LD・ADHD・高機能自閉症児への支援の実例—. 初版. 東京: 川島書店, 2006: 3-23.
- 8) Eisenberg, N., & Mussen, P. The roots of prosocial behavior in children. Cambridge England: Cambridge University Press. 1989. (菊池章夫, 二宮克美訳. 思いやり行動の発達心理. 初版. 東京: 金子書房, 1991)
- 9) 二宮克美, 山岸明子, 首藤敏元. たくましい社会性を育てる. 祖父江孝男, 梶田正巳編. 日本の教育力. 初版. 東京: 金子書房, 1995: 26-50.
- 10) 二宮克美, 首藤敏元, 山岸明子. たくましい社会性に関する縦断的研究 (1). 日本教育心理学会第38回大会発表論文集 1996: 63.
- 11) 嶋田洋徳, 戸ヶ崎泰子, 岡安孝広, 他. 児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス軽減効果. 行動療法研究 1996; 22 (2): 9-20.
- 12) 石川信一・坂野雄二. 自己評定による児童の社会的スキルと不安症状の関連. カウンセリング研究 2006; 39: 202-211.
- 13) 松山安雄, 倉智佐一. 学級におけるスクール・モラルに関する研究 (第1報). 大阪教育大学紀要第IV部門 1969; 18: 19-36.
- 14) 松山安雄, 倉智佐一, 西山 鴻. 学級におけるスクール・モラルに関する研究 (第2報). 大阪教育大学紀要第IV部門 1976; 25: 93-103.
- 15) 塩見邦雄, 中道正昭. 学校生活における児童の自己認知に関する研究. 学校教育学研究 2002; 14: 69-78.
- 16) Low, S. M., & Altman, I. Place attachment: A conceptual inquiry. In I. Altman and S. M. Low (Eds.), Place Attachment. Vol. 12 Human Behavior and Environment. New York: Plenum Press. 1992: 1-12.
- 17) Howes, C. Attachment relationships in the context of multiple caregivers. In J. Cassidy, & Shaver, P. R. (Eds.), Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications. New York: The Guilford Press. 1999:

- 671-687.
- 18) マイケル・ルイス, 高橋恵子編, 高橋恵子監訳.
愛着からソーシャル・ネットワークへ: 発達心
理学の新展開. 初版. 東京: 新曜社, 2007.
 - 19) 内藤 徹. 小学生の向社会性測定のための質問
紙法の吟味—特に地域差を中心として—. 金城
学院大学論集 (人間科学編) 1986: 12: 67-79.
 - 20) 金子勲榮. 質問紙法による小学生の向社会性測
定の試み. 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編)
1981: 30: 269-279.
 - 21) 金子勲榮. 質問紙法による小学生の向社会性測
定の試み (2) —一因子構造の吟味—. 金沢大学教
育学部紀要 (教育科学編) 1982: 31: 119-125.
 - 22) 小野寺正巳, 河村茂雄. 学級における対人関係
能力育成プログラム研究の動向—級単位の取り
組みを中心に—. カウンセリング研究 2003:
36: 272-281.

[Summary]

This study aimed at the investigation of the relationships between prosocial behavior and school/classroom attachment in elementary school children. They were asked to answer two questionnaires: (1) Prosocial Behavior Scale and School and (2) Classroom Attachment Scale. The results showed that girls scored higher in the prosocial behavior scale than boys. The scores of the prosocial behavior scale also decreased in higher graders. There were positive correlations between school attachment and prosocial behavior in lower and middle grade girls. The positive relations were found between prosocial behavior and school/classroom attachment in higher grade, in both boys and girls.

[Key words]

prosocial behavior, place attachment, school, classroom, elementary school child